会津娘子隊

後藤雪山　作詞作曲
小野　昭　編曲

一　頃は戊辰の中の秋城下に砲煙立ち上がる
照姫警護に花と散るあわれ会津の娘子隊
武士の猛き心にくらぶれば
数にも入らぬ我が身ながらも

二　右へ左へ小蝶舞隊長竹子の初陣に
敵の弾丸胸に受く会津若松涙橋

三　唇かんで薙刀をしっかり抱いて母を呼ぶ
梅の木の下今しのぶ会津坂下の法界寺

会津の少女

松口月城

男児義に赴く吾何ぞ退かん　会津の少女気慨多し
悲憤けっ起す娘子軍　白襷鉢巻餘烈あり
或は薙刀を提げて陣頭に立ち　或は猛火を冒して保塞を守る
花の顔今夜叉の如く　縦横奮戦玉砕を期す
もののふの猛き心にくらぶれば
数にも入らぬ我が身ながらも
見る可しその義その魂　譲らず男児の白虎隊
幕末の悲劇鶴ケ城　長く行人をして感慨深からしむ

護領の若竹（中野竹子の歌）

作詞　佐藤信親
作曲　中島笙人

一　硝煙立ちこむ会津藩　領土の護りに若竹が
母と妹の死の誓い　坂下いで立つ白襷

二　東戸の口西もまた　敗れて闇き東松
吹く風さえも腥さき　二十四日の霜の朝

三　遮る敵を柳橋　手練の薙刀切り伏せど
飛び来る弾丸は雨あられ　ああ紅に身は殪る

四　碑丈年経る法界寺　秋ごとむせぶ虫と風
戊辰の華は烈々と　誉を世々に竹子女史

法界寺正面

姉妹涙橋の奮戦

会津戊辰戦争の烈女

「中野竹子略伝」

福島県会津坂下町緑町
法界寺内　小竹会

中野竹子の略伝

竹子の像（田代喬之画）

会津藩主松平容保公の臣中野平内は江戸常詰の納戸役で、書は持明院流の日本総締方であった。弘化四年三月竹子は江戸藩邸で生れた。母は幸子、弟は豊記、妹を優子といった。

竹子は資性英敏、容姿豊麗、才智は衆にすぐれ、年とともに書をよくし、武技に達し、十四、五才には経史に通じ、詩文和歌にすぐれ、度々藩の賞典をうけた。実に典型的な会津女子としてその将来を嘱望される女性であった。

明治元年五月、戊辰戦争がおきた。中野一家は会津に帰り、母子三人は坂下の玉木家に寄寓することとなり、父平内は青龍隊に、弟は朱雀隊に入って戦列にあった。

八月二十三日未明西軍は城下に雪崩こんだ。中野家では「いよいよこの身を君に捧げる時がきた」とかねての覚悟に死を決し、用意の衣服をとり出し、白地の布の鉢巻、大口の袴をつけて一刀を構え、深紅色の襷を綾取薙刀を小脇にして、勇壮にも坂下より若松に向って出陣した。時に幸子四十三才・竹子二十二才・優子は十六才であった。二十三日の晩は法界寺に一泊し、翌二十四日朝、陣将古屋作左ェ門の指揮下に入り、坂下の剣士渋谷東馬一行四十名と合流し、涙橋を渡り入城の手筈を整えて、長州大垣の軍と壮烈な戦闘に入った。母子三人薙刀を縦横に打ち振るっての肉弾戦に、敵味方共に只驚嘆するのみであった。嗚呼然し、飛弾一発竹子の胸を貫いた。倒れた竹子のもとに母と妹はかけよったが、鮮血草をそめ重傷いかんともすることができず、涙ながらに覚悟のことと母と妹は首級を落とし、小袖に包んで後退し、翌二十五日坂下に退いて、その首級を法界寺に葬った。

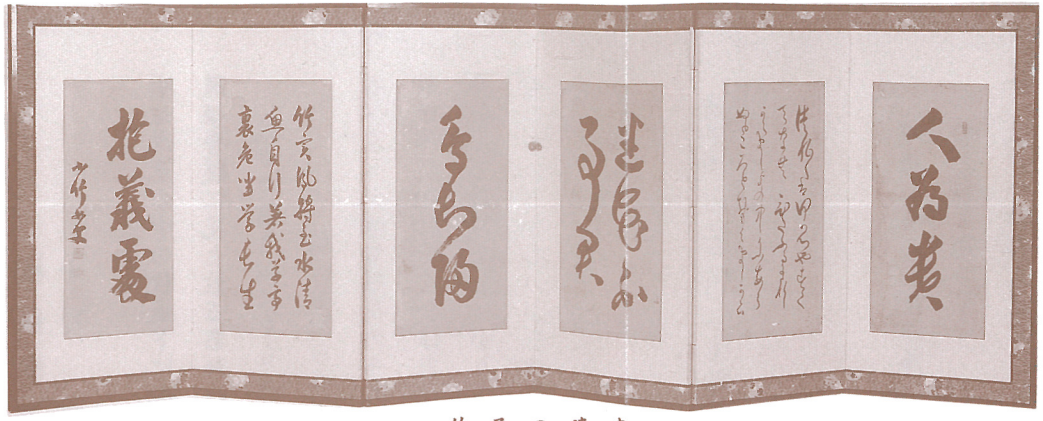
越えて明治二年越後の府吏沢田・横井両氏によって墓が建てられ、五十年祭に現在の墓処となった。

辞世の歌に〝武士の猛き心にくらぶれば
数にも入らぬ我が身ながらも〟

義を抱いて節を守った嫋竹の面白躍如として万人の胸に迫る。

薙刀は柄の長さ五尺三寸・刀の長さ一尺五寸、現在は法界寺に寺宝として保存されてある。

殉節の功名は一時の叢とならず、年々に増す竹の如く根強くここにのびきたって昭和四十三年十月二十一日、嫋竹の名に因む小竹会となって年々墓前祭を営み、慰霊顕彰につとめている。



竹子の遺書

中野竹子の墓